



田中さんの看護婦人生

昭和2年生まれ

「60年も前の事だけど、よく覚えて
います」

田中君子さん（南千住在住）は、埼玉出身。尋常高等小学校を出てから看護学校を1年で卒業しました。

「2枚羽の飛行機の練習場でした」

高崎線籠原駅近くの三ヶ尻（熊谷陸軍飛行学校（少年飛行兵養成所）の医務課（診療所）に昭和18年、看護婦として勤務していました。午前9時〜5時まで勤務でお給料は2円位だったと思います。白い帽子にひだのついたひきづつて歩くような長いスカートの制服は支給されましたが、戦時下のため断髪に帽子をかぶり、私服のもんぺ姿に予防着の白い割烹着を着て勤務していました。



少年飛行兵の病気や怪我には、少佐、大尉中尉など軍医が治療していました。軍医も白衣は着用せず、軍服姿でした。医局で一番偉い少佐の軍医が来ると失礼があつてはと衛生兵達はトイレに隠れてました。また、給仕と言つて、将校のチャーカー（靴）を磨いたり、使い走りをする人もいました。「ブドウ糖が甘くて、こっそり舐めたこともありました」
当時は点滴の設備もなく、長さ30cmくらいのガラスの注射器でゆっくりブドウ糖を

静脈注射をしてました。ブドウ糖は5プロ（%）〜50プロ（%）とありましたが、50プロは濃度が高い為、500CCの液がなかなか入らず、注射器が重くて苦労しました。たまたみ針程ではないですが、針も太くて注射後は、ブドウ糖をちらす為に熱いタオルで湿布をしてました。静脈注射するのは恐かったですね。

「痛いのは、そっちもちね」



軍医が化膿した所にメスを
入れるときも麻酔なしで、治療受けている兵隊さんは歯を食いしばって我慢してました。傷を縫うときは、釣針のような三日月形の針で縫ってました。

また、軍医の歯医者さんもおり、歯を抜いたりすると訓練兵は練兵休就寝許可がもらえて休むことができました。

治療器具は今のようには使い捨てではなく、注射器や針、ガーゼ、綿、包帯も洗ってから、ぐらぐら煮え立つ釜で15〜30分熱湯で滅菌消毒をして使っていました。注射針も先をやすりで研いでとがらせて使いました。治療には、小指の頭に綿をちぎり、ガーゼで巻いた綿球でマーキュロ（赤チン）・リバノール等の消毒薬をつけていました。

「食べるかい」

白い羽二重のマフラーをなびかせてカーキ色の上下の特攻隊の人達が練習に来ていました。時々捻挫したからと来院した時に、明治の板チョコを持ってきてくれたのが楽しみでした。砂糖がない、塩がないと言いながら軍ではかなり食料があつたのではないかと思えます。

終戦後、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖されて、実家の農業を手伝ってましたが、新聞広告を見て昭和25年頃、病院に勤務し、精神科を担当しました。

当時は部屋には鉄格子があり、こめかみに電流を流す電気ショック（ES）で治療をしておりました。ゴムにガーゼを巻いて患者さんに加えさせ、あごをしっかり押さえて電流を流してました。20〜30分位で意識が戻り、頭が痛いと言っていました。ロボットミ手術（前頭葉切除、戦後しばらく、主に統合失調症患者を対象として各地で施行）も行われてました。

その後、結核病棟にいましたが、当時はストレプトマイシンなどの治療薬もなく、肋骨の骨を何本か切り取って病巣の肺切除を行ってました。

「点滴なんて便利なものができてました」

結婚後、南千住にきて専業主婦になりましたが、50歳で滝野川の病院の精神科に勤務しました。点滴があり、電気ショック治療も鉄格子もなくなっており、治療が薬の処方でも済むことに20年のブランクの間の医学の進歩に驚きました。

田中さんは定年後も73歳まで勤められ、北区から感謝状もいただきました。貴重な体験を思い出していただき感謝です。

すまいるたうんふれあい亭

5月9日（日）12時半〜
瑞光ひろば館2F 無料
問合せ090（2657）0300 鬼塚迄